




最果て星の機械姉

めぎ



最果て星の機械姉

めぎ

遠い未来、宇宙に進出した人類の感覚からしても「辺境」と言って差し支えない宙域。そこに小惑星サイクロプス= 51 Δが浮かんでいる。

サイクロプスは直径およそ10 kmの巨大な岩塊である。その表面には無数の亀裂や穴があり、まるで巨大な生物の眼のように周囲を睨みつけていた。

小惑星表面の最も大きなクレーターの中、恒星からの光が1 Kmほどの巨大な人工物を照らし出す。かつては宇宙船であったことを示す推進機は僅かに朽ちはじめ、船体から伸びたアームが巨体を固定している。その周囲にはいくつもの無人機械が備え付けられたアームで表面の岩塊を採掘し背中に積み込んでいく。

宇宙船、かつてはアトラス 04A と呼ばれていた物の内部。

無人機械達の採掘した鉱石がベルトコンベアで運ばれていくのを三人の女性が見守っていた。

ショートカットの髪、整った顔に魅惑的なプロポーション。美人と言って間違いないが、三つ子のように同じ容姿を持ち同じ銀色のボディースーツ身を包んだ女性たち。

彼女らは顔を向き合わせると順に口を開く。

「ディアβ：ユニットAより報告します。本日の精製作業進捗率、102.8%。問題ありません」

「ディアβ：ユニットBより報告する。本日の採掘作業進捗率、105.6%。順調だ」

「ディアβ：ユニットCよりアトラス 04A の機能に報告すべき問題点なし」

互いの報告を確認すると彼女たちは頷くでもなく、踵を返して互いの担当区域へと戻っていく。

彼女たちは人ではない。ディアβタイプと呼ばれるアンドロイドである。

とある採掘企業が建造した大型採掘用宇宙船であるアトラス 04A には元々10名ほどの人間のクルーが登場していた。彼らは5年ほどをかけて人類の生活圏から希少資源が眠る小惑星へ航行し、自動機械による採掘システムが安定するのを見守った後、資源回収船に登場して故郷に帰る。十年以上の勤務の見返りとして十分な報酬と年金が保証される、はずだった。

出港後半年ほど経ったある日、航行中の些細な事故により人間のクルーは全員が死亡した。

残ったのは航行中の業務の補助、採掘システムの安定化以降の管理を任される予定だったディアβタイプアンドロイド三体。

本来なら船を帰還させるのが筋ではあるが、もともと片道航行予定のア

トラスはそれも叶わなかった。その為、くだされた決定は残されたアンドロイド三体にそのまま航行をまかせ、採掘システムの構築とその後の運用まで全て行わせる、というものだった。元々ディアβタイプは人間並みの判断力を備えている。不可能な話でもないし、これが成功すれば以後は志願の少ない上にコストも掛かる人間クルーが不必要となる。最初からその計画を試すのであれば失敗時の責任問題に成りかねないが、この状況下で反対するものはいなかった。

かくして、ディアβタイプ三体は人間不在のままサイクロプス= 51 Δへと辿り着いたのだった。

ディアβタイプは人間とのコミュニケーションを繰り返すうちに人格モジュールヘデータが蓄積されて疑似人格も成長していくのだが、クルーの死によりその機会が失われた結果三体は初期設定の状態から大きな変化をしていない。そんな彼女達だが、日々の業務をこなしていく中で幾つかの決まり事が出来てきた。

その1つが「状況報告は緊急時以外ネットワークによる通信ではなく会話で」ということだった。元々、短いクルーとの生活で行ったことを踏襲しているだけなのかもしれない。

採掘システムが稼働してから10年程。大きな問題は発生していない。で、あれば。彼女たちの稼働限界が来るか、希少資源が彫り尽くされる日の訪れか。

いずれかの終わりが訪れるまで、静かで平穏であるが代わりのない日々が繰り返される。そう思われていた。

ディアβ：Aの担当は精錬システムの管理が主である。だが、ほとんど全てが自動化されたシステムはディアβ：Bの担当する採掘部門から送られてくる鉱石の処理具合を確認し、数年後にやってくる予定の回収船の為に作られるインゴット数を確認する以上のことを要求してこない。ごく稀に機器の故障やエラーを修復するために駆けずり回ることもあるが人間であれば単調な毎日に息が詰まっていることだろう。

だが、元々長期の任務を行う予定であったディアβ達にはシステムの安定稼働報告が電子頭脳の報酬系の上位に組み込まれている。はたから見れば無表情に立ちすくんでいるように見える中、予定数を僅かに超えるインゴットが格納されていることに彼女なりの「幸福感」を覚えている最中。

久しく稼働していなかった受信機構が艦内ネットワークからの信号をキャッチする。

『ディアβ ユニット C より連絡。ユニット A、ユニット B。直ちに管制室へ移動を』

『現在ユニット B は採掘機器 121 号の修理作業中。こちらを優先する』

『却下。緊急を要する事態が発生』

『承諾。ユニット B は作業を中断する』

『ユニット A も了承しました』

この日々が始まって以来の招集。ユニット A は幸福感に浸っていたことを邪魔されたことに僅かな「不満」を抱きながらも管制室へと向かう。

管制室の扉が開くと 2 つ並んだ同じ顔が同時にユニット A に向き直る。「二体共、作業の中断をさせたことを謝罪する。緊急の状況報告をしたかった。現在起こっていることとのデータ共有を行う」

ユニット C が口を開くと残り二体の電子頭脳に情報が送信される。

「救難信号の受信ですか？」

「そう。この宙域近辺からのもの。恐らく、遭難した宇宙船からの救命カプセルと思われる。この場合、可能であれば全てに優先して救出を行うことが我々には優先される」

「しかし、回収手段はあるのか？ 船外作業は可能だが回収用の宇宙船はない。アトラスには宇宙船としての機能はすでにないぞ」

僅かに与えられた生前のクルーによる影響か、微妙に乱雑な物言いの B に対して C は答える。

「問題はない。このタイプのカプセルはある程度の自立航行が可能。幸いカプセルの軌道はダイダロスを掠める。こちらから信号を送信すれば自動でこの近辺の地表まで誘導できる」

「了解しました。それでは直ちに送信を行うことを提案します。ユニット B、異存は？」

「ない」

B がきっぱりと答えると、待ち構えたように C が信号を送信して。

彼方の宇宙で彷徨う救難カプセルが、僅かな燃料を消費してスラスターを動作させた。

アトラスの近く、切り立った岩塊にほとんどの推進剤を使い果たした救命カプセルが着地する。船外作業スーツのバイザー内からその様子を確認した三体は巧みに連携し、カプセルを掴むとエアロック内に運び込む。

受信した信号から判明していたことだが、カプセルは一人用のものだった。

「救難カプセルの番号称号終了。三年前、周辺宙域で事故を起こした移民用宇宙船のもの。生存者はゼロ、と記録されている」

カプセルを船内に移送しながらユニット C が二体に告げる。

「三年前ですか？ それでは既に搭乗者も死亡しているのでは？」

僅かに眉を曇らせ、傷ましさを感じさせる表情を浮かべる A に C は首を振る。

「いや、脱出カプセルにはコールドスリープ機能が搭載。正常機能中」

「生存可能性は高いということだな。だが解凍処置の必要があるか？ このまま保管したほうが良いのでは」

「ある。カプセルのバッテリーは残り僅か。この人間は運が良かった。ユニット A、医療システムのチェックを」

「了解です。それでは解凍を開始します」

ユニット A がアクセスパネルを操作すると、解凍処置の開始が表示される。

僅かずつ増加するバーグラフを肩を寄せ合い見守り続ける三体。安全な技術になっているとは言え、各種の薬品の投与と適切な処置が必要とされる解凍処置には半日以上の時間がかかる。

その間、三体は身動きもしない。不意に沸いて起きたこの事態に普段の業務を放り出している様は管理者の人間がいれば彼女らに異常が起きたと感じたかもしれない。

固唾を呑んで、とも思えるように見つめ続けられたカプセルのパネルに「解凍処置終了」の文字が浮かび上がる。

続いて空気が抜ける音と共にカプセル上部が開いていく。

中を覗き込む6つのアイカメラが内部の様子を捉えれば。

映し出されたのは薄い金髪を宿した小さな少年。ある程度の感受性のある人間がいれば「天使のような」と枕詞がいただろう。その臉がゆっくりと開き、アイカメラと目線が会う。

「……あ、れ……？ おねえさん、たちは……え、えっと……ぼくは……だれ……？」

その、絞り出すような言葉を聞いた瞬間。ディアβ 三体の瞳が震え、電子頭脳に初めて感じる何かの衝動が走り抜けた。

「それでは名前も、どこから来たのかも覚えてはいないのですか？」

ユニット A はきょとんとしている少年に話しかける。三体の中では対人コミュニケーションの経験が多いとはいえ、人間の感情の機敏を読み取れ

るほどでも無いことは自覚している。この様な状態であれば人間は不安にかられている確率が高い。ましてや相手は若い少年だ。

「うん。他の人がいたことはなんとなく覚えてるけど……これ、ぼく乗ってたんだよな？ ……ごめんなさい。ぜんぜん、おぼえてない」

首を振る少年は三体に済まなそうな顔をするが、不安を感じている様子は見受けられない。

「おそらく、コールドスリープによる記憶障害。低確率ではあるが症例はある。不運だったとしか言いようがない」

「でも彼をこれからどうするんだ？ 次の輸送船の到着予定は 30511 時間 46 分後だ」

じっと少年を見つめながら呟く B に、珍しく食って掛かるように A は顔を向ける。

「ユニット B。その話題は今は良いかと。彼の不安を増す必要はありません。ユニット C、食料や生活物資はありますよね？」

「問題ない。予備も含めて成人男性 10 人、10 年分以上の量が備蓄されている。保存庫が稼働している限りは大丈夫」

「了解しました。まずは彼が生活できる場を確保しましょう……どうしましたか？」

気がつけば少年がユニット A を見上げている。精一杯背伸びしても胸の高さまで届かぬ目元に浮かぶ表情は不安、というよりは好奇心に満ちたもののように見える。

「お姉さんたち……ロボット、なんだよね？」

「はい。我々は採掘用宇宙船アトラス 04 A に搭載されたディアβ タイプアンドロイド、ユニット A、ユニット B、ユニット C です」

「いつも A、B、C って呼び合ってるの？ ……呼びづらいなあ。ね、ぼくが名前つけてもいい？」

「な、名前ですか、その、ABC で不都合はないのですが、はい。貴方が呼びやすいのならば」

戸惑いの表情を浮かべた A に微笑みが向けられれば、その混乱は深まり感じたことのない電子頭脳の負荷が生じていく。

「A かぁ……A、A……。アンジェリカ。アンジェリカとかどうかな？」

「アン、ジェリカ……？ それが私の名前、でしょうか……？」

「う、うん。パッと思いついた名前だけど……」

戸惑うような素振りを見せる「アンジェリカ」を少年が覗き込めば。不意にその瞳が潤んだような光を帯びる。

「は、はい……！ とても、とても……結構。素敵。良質……い、いえ。嬉しい。です……」

腰を落としたアンジェリカは少年の腰に手を伸ばし、軽く抱きしめる。

ふわ、とアンジェリカの髪が幼い顔をくすぐり。少年は甘い香りを感じたような気がした。

「……A。いや、アンジェリカ。ずるい。ずるい、ぞ。お前だけ」

「ええ。抗議を。……私達にも。それを。命名を」

無表情に近かった先程までと打って変わり、不満そうに詰め寄る二体にアンジェリカは困惑の視線を送る。

「あ、あの。二人とも？ 少し落ち着いて下さい。彼も驚いていますよ。わ、私だって名前を頂いたばかりで……」

たじろぎながら彼女は助けを求めるように少年に顔を向ける。

「あ、う。うん。それじゃ……BとC……。ピアンカ、クレア……とか……？」

詰め寄る二体に圧倒されながら答える少年に、ぱ、と花が咲いたかのような笑顔が二体に浮かぶ。

「ピアンカ……う、うん。いいぞ。とてもいい……ピアンカ……うん」

「クレア、ですね。はい、問題ありません。ええ……有難うございます。……あ」

そこまでクレアが言った時に少年を呼ぶ名前もないことに三体は気付かされる。カプセルの中には少年の身元を示す一切の痕跡は残っていなかった。

三体の戸惑う理由を察したのか、苦笑いを少年は浮かべる。

「そ、そっか……いいよ。お姉さんたちがぼくの名前決めて」

「え？ そ、そう言われましても……え、ええと……わかりました。ピアンカ、クレア……」

目の前の姉妹二体に信号が送信され、意識同士が結合される。たどたどしい言葉の羅列では今のタスクを実行できない、と判断した三体はたっぷり12.3秒、膨大なデータを伝達、少年にふさわしい名前を提案し合う。

こほん、と咳払いをしたアンジェが一歩前に出て言葉を告げようとするが、両脇から二体が睨みつければ声を揃えて。

『ガブリエル』

ぱちくり、とまばたきを繰り返した少年が笑みを浮かべて頷いて。

三体のアンドロイドと少年はこの時から家族となった。

少年と三人のアンドロイドが新たな名前を得てから三年弱が経ったある



日。

アトラスの倉庫内、自動機械達がインゴットを積み上げていく様を少年、少しばかり背が伸びたガブリエルが確認している。

「今日の生成数、451 個っと。問題なし……でいいかな？ アンジェリカお姉ちゃん」

振り向いた目線の先には長い、少しウェーブの掛かった金髪と青いジャケットに身を包んだアンジェリカが微笑んでいた。

「はい。よく出来ましたガブくん。予定時間より 13 分も早いです」

嬉しそうな声とともに、とん、と床を蹴ると通常区画よりも弱い重力が彼女の身体を宙に浮かせ、そのままスローモーションのように少年に飛びかかり抱きしめる。大きな乳房に口をふさがれた少年はもがいて苦しさを伝えれば、照れ笑いをしたアンジェリカが手を離す。

二年前の辿々しさは微塵もなく、少年との生活により人格モジュールが成長したことは確実にあったが、その方向性は通常のアンドロイドとはすこしずれているようにも思えた。共に生活を初めて半年も経った頃には三人は自主的に予備パーツを使って外装を変更。見た目も只のディアβタイプであった頃とは変わっている。

「さてさて。少し余裕ができましたね。せっかくですし戻ってお茶でもいれましょうか」

少年の返事も待たず、手を引いて軽く跳ねるように倉庫出口へ向かう。

短いながらもタスクもなく、少年との会話を続けられる時間を想像しながら幸福そうに扉を開けば、わずかに目尻が上がり上がった赤いアイカメラと目が合った。

「う。ピアンカ！ 何ですか、まだ十二分以上余裕はあるはずですけど！」

抗議をするアンジェリカを睨みつける赤い髪をポニーテールにまとめた姿のピアンカ。彼女は僅かな怒気をはらませてアンジェリカに詰め寄る。

「ああ、今日は確かに定時前だ。だが！ 昨日は作業が遅れているのも構わず三十分もガブを連れ回していただろうが！ お陰で私の作業は遅延している！ そちらの作業が終わったならとっととガブを渡してもらおうぞ！」

「だ、ダメです！ これからガブくんはお茶の時間ですから！ 予定時間まではダメです！ そ、それに今ピアンカがやらせようとしているのは船外作業でしょう。そんな危ない事は私達がすればいいじゃないですか。ガブくんに万一のこともあったら……」

「万一、というのは想定外の事だ。それが起こる可能性のある事は私達も同じだ！ もし、私達が全員大破してもガブが強く生きていけるように育て



るのが私達の……あ、が、ガブ？ ちがう、ちがうぞ。今のは万一、いや億が一に備えてのことだからな？ 姉ちゃん達はガブを置いて壊れたりしないからな……」

厳しい姉の言葉に、僅かに悲しげな表情を見せた少年に慌ててあたふたと取り繕うピアンカ。

その様子に思わず小さな笑いをたてたアンジェを真紅の瞳が睨みつける。

「何だ、アンジェ。その笑いは」

「ふふ、失礼。貴方を笑ったんじゃないなくて……昔の私達をちょっと思い出して、ね」

「何がおかしいんだ。異論がないならガブは連れて行くぞ。……あ。ガブ。やっぱり船外作業はまだ大変か？ やっぱり今日はユニット修理にしようか……なに？ 姉ちゃんと一緒なら怖くない……？ そ。そそ、そうか！ 偉いぞ強い子だガブ！ 怖くなんか無いぞ、お前に何かあったら姉ちゃんが宇宙の果てまでだって飛んでってやるからな……」

抗議する余地もなく、ガブリエルと二人きりの時間を奪われたアンジェは不満げな表情で扉を見つめていたが、その背後から別の声がかかる。

「アンジェ。本日分の生産量確認しました。全体的に目標数を上回っています。もう少しペースを落として機器の負荷を下げることを提案します。……おや？ ガブさんは一緒ではなかったの？」

振り返れば、ショートの前髪に眼鏡型の処理デバイスを着用したクレアがタブレットを片手にあたりを見回している。

「残念。ピアンカに取られちゃいました」

「……成る程。では私も船外作業の手伝いでも」

「クレアは船外作業の経験値はほとんどゼロでは？ 邪魔になりそうな気がします」

くすり、と笑ってすこし意地悪な言い方をしてみるアンジェ。

「それは否定できませんが……その、貴方達肉体労働組の方がガブさんとの時間が多いので……」

結局、ここまで報告に来たのもガブリエルに理由をつけて会いに来ただけなのだろう。わかってはいたが、改めて考えるとおかしい状況ではあった。「ごめんなさい、悪く言ったつもりじゃないの。……でも、私達すっかり変わっちゃいましたね。二年前までは会話も必要最低限で。報酬系が刺激されるのはタスクの達成が一番だったのに。今ではノルマが済めば三人ともガブくんのことばかり」

「はい。私達は根本的には人間に使えることを至上命題にするよう設定され

てますから。その事自体は正常動作です。ただ……やっぱり。あの時から感じていた情動はその範疇なのかと自問することもあります」

眼鏡に手を当て、倉庫に並ぶインゴットの山を見上げながら述懐するように言葉を発するクレア。

「そうですね……。でもクレア。それは嫌？」

「いえ。全然」

迷わずきっぱりと言い返す姉妹にアンジェは微笑んで。

「そうですね。私も。きっとピアンカも……。今が幸せです」

数日後。アトラスの片隅にある整備室。

以前着用していたボディスーツに着替えたアンジェリカが落ち着きの無い様子で座っていた。

ディアβタイプは百年近い耐用年数を持つがそれには劣化部品の交換、冷却液の交換などのメンテナンスが必要になる。

そわそわとした様子で椅子から立ち上がり、大した広さのない部屋をぐるぐる歩き回っては座り直す。誰が見ているわけでもないのに行われる感情表現の露出。以前の彼女であれば決してしない行動は彼女の人格が単なる行動の模倣ではないことを示していた。

同じ行動を三度ほど繰り返したあたりで整備室のドアが開き、少年が息を切らせながら現れる。

「お姉ちゃん、遅れてごめん！ ピアンカ姉ちゃんがなかなか離してくなくて……」

ガブリエルは彼女達と学び始めてからすぐ工学系に才能を示し始めた。しばらくの間その才は船内のメンテナンスや、採掘機器の修理に発揮されていたが一年ほど前「お姉ちゃんたちの整備をさせて！」と自分から申し出てきた。

若干の不安、少年に裸体を晒すことへの羞恥心などはあったが、一度試しにそれぞれが整備を受けた後、三人は全員一致でその後もガブリエルにメンテナンスを任せることを決定した。

「もう。ピアンカったら。ピアンカだって明後日にメンテナンス予定なのに。……じゃ、早速始めてもらっていいかな？」

少年の返事も待たず、アンジェリカはボディスーツの首筋にあるデバイスに手を当てればロックが外れ、スーツがはらりと床に落ちる。

スレンダーな身体に似合わぬ大きさの乳房をふる、と揺らしながら部屋中央の整備台に横たわるアンジェ。

だが。どうもガブリエルの様子がおかしい。普段どおりならすぐにアンジェのメンテナンスハッチを開いて整備を開始するはずなのに、アンジェから視線をそらし、落ち着かない様子で顔を赤らめている。

「ガブくん？ どしたの？ 自分でメンテハッチ開いた方がいい？」

「う、ううん。じゃ、開けるね……」

普段と違い、震える指でアンジェの左乳首を摘み、小さく回転させて押し込めばかち、と音がして沈み込む。

「ん……！ 胸部ハッチロック解除……！ ん、ん……っ！」

小さな呻きと共にアンジェの左乳房がわずかに浮き上がり、谷間に現れた分割線が濃くなって左乳房が外側に開いていく。

静かに明滅する制御回路が空気に晒され、少年がその内部を見つめればアンジェの電子頭脳に言語で表現不能な感覚が発生する、それがいつもの情景だったが。

「どうしたの、ガブくん？ え、えっと。お姉ちゃんのメンテするの……ひょっとしてめんどくさくなっちゃった？」

不安げに少し体を起こすアンジェリカから、ガブリエルの目がそらされる。その拒絶するかのような動きを見れば人格モジュールに悲哀の感情が生まれ始めるが。

「ち、違うの……。はやく、メンテしてあげたいんだけど……。そ、その。あのね。なんか僕……この前お姉ちゃんに抱っこされたときから……なんか、変なの」

「変って……病気？ どこか痛いの！ 大変、メンテどころじゃないよ！」

慌てる姉に顔を赤らめるガブリエル。

「びよ、病気、なのかな……。あの時からば、僕、こんなになっちゃって……。あの後ピアンカ姉ちゃんと着替えるときもずっとこんな感じで……。たまに戻るんだけど、その、お姉ちゃんたちの事考えるとすぐ……。今も、お姉ちゃんの裸見てからずっと……」

恥ずかしそうにズボンを下ろせば、白い下着がこんもりと盛り上がり、大きな山を形作っていた。

「お姉ちゃん……僕、大丈夫かな……病気なら……あ、あれ？ おねえ、ちゃん？」

股間のテントが視界に入れば、アンジェリカのアイカメラがちゅい、ちゅい、と小さな駆動音を立てて収縮を繰り返し、惹きつけられたように小山を凝視する。

ディアβタイプにはセクサロイド機能は標準装備されている。その為、ア

ンジェ達は人間の生殖行為については正しい知識を備えていた。

本来であればクルーの性欲解消にも使われるはずだった機能。それが使われないままに年月を過ごした結果、性的欲求は封印されていたのだが。

ちちち、と胸の回路が音を立てながら小さく震えるままの姉の姿に不安を覚えたガブリエルが覗き込む。

「お姉ちゃん？ だ、大丈夫？ こ、故障っ！ ご、ごめんね僕ばかり！

いま、点検するから……うあっ！？」

アンジェが勢いよく立ち上がると同時にガブリエルはバランスを崩し尻餅をつく。

そのまま覆い被さるように四つん這いになれば、アンジェの顔が近づいてくる。

「え？ お姉ちゃ、んむう……んふ、ちゅぷ……」

唇が重なり、舌が絡まり合い生身と機械の眼球が互に見つめ合う。焦点制御を失ったアンジェリカのアイカメラが戸惑う少年の表情を捉えれば、開いた旨の回路が激しく点滅し、そればかりか小さなスパークを発し始める。

第二次性徴、性的興奮による勃起。射精可能になった現れ。彼女が少年の身体に起こった変化を認識した瞬間、封印されていた状態の性欲値が上昇し、回路に負荷がかかり始めていた。

「ん、ぁ……お、おねえちゃん……あっ！ お、おねえちゃんっ！？ どうしたのっ！ か、回路がばちばちいって……だ、大丈夫っ！？ 故障してるのっ！？」

姉の異常な行動に戸惑いながら唇を離れたガブリエルが、ショートする回路に触れれば電子頭脳を快楽信号が貫いて。

「びゅぁああっ♡ かか、快楽中枢回路にいい異常が発生、しししまし、ぴゅぎいっ！？ ほ、保護対象の勃起を確認しました。せせ性交機能使用可能でで性交機能を使用しますかしし使用しますかぴゅぎがっ！？ あ・あ・あっ！？ が、ガブくんっ♡ や、だめ、そ、それ、お姉ちゃんにみせたら、がびっ！？ せせ、性欲設定エラー EA801が発生ししっがぴいいいっ♡」

「お、おねえちゃあんっ！ こ、こわれちゃだめっ！ い、今修理してあげるから、じっとして……あああっ！」

ショートしている回路を取り外そうとした指が、アンジェリカが暴れたせいで滑り、むき出しの端子に汗ばんだ指が触れる。エラーを起こしながらもどこか甘い声で乱れる姿に無意識のうちにペニスは大きく膨れ上がりそ



の様がアンジェリカの欲望を増加させれば、激しい火花が回路から散りはじめる。

「びゅぎいいいっ♡ かか、快楽中枢回路に不正な信号がががが保護対象の勃起ををを性欲値が上昇しし性交機能を使用しますか使用しますか使用しますかただちに性交機能を使用してくださいさ性欲値が処理できません重大な故障のおそれがががががひぎいいいっ♡ あーっ！？

あーっ♡♡♡ だめええーっ♡」

「お、おねえちゃんっ、せいこう、せいこうってすればいいのっ！ する、するから、こわれないでえ……」

悶え転げて泣き叫ぶ姿に、ガブリエルがわけも分からず答えた瞬間。

がば、と跳ね起きたアンドロイドが、胸の回路を激しく点滅させながら少年を押し倒す。

「せせ、性交機能を使用します女性器ユニットの起動をかくにんししびゅぎいいいっ♡ が、ガブくん♡ ごご、ごめんさいっ！ い、今、おねえちゃん、おかしくなってるのっ！ 今すぐスイッチ、切ってえ……。こ、このままじゃ、おねえちゃん、おねえちゃん……ガブくんを……」

少年の上ののしかかり下着を下ろしかけた時、人格モジュールが身体の制御を取り戻しその欲望を押し留めようとして、少年に自らの機能停止を懇願する。しかし。

「せ、性交……って。せっくす、のこと……？ ……いいよ。僕、お姉ちゃんと……せっくす、したい……」

「え？ が、ガブ、くん……？」

「だ、だって。ライブラリーのドラマとか……お話とかでみてれば……調べたし……してる、よ。好きな女の人とする、ことだよね……。僕、お姉ちゃん達のこと、大好きだから……いいよ。お姉ちゃんが壊れないために……せっくす、してください」

少年が震えなが呟けば。機械知性の理性は決壊した。

「が、ガブ、ガブ、くくっ♡ ……す、するうううっ♡ おねえちゃん、ガブくとせっくす、するのおおおおっ♡ すきいいっ！ おねえちゃん、ガブくん、すきいいいっ♡ がびーっ！？」

歓喜の言葉にノイズを混じらせながら、下着を脱ぎ捨て、ぷしゅ、ぷしゅ、と音をさせて潤滑液を撒き散らす割れ目を少年に晒せば。

腰を落として狙い違わず少年の欲望の塊を飲み込んでいく。

じゅぶ、じゅぶ、という粘着質な音と外部まで漏れる機器の動作音が混じり始める。



「あ・あ・あ・あ・あっ!?? ぴゅぎ、きゅいひいひいっ♡ が、ガブ、く、くく、きもひ、いっ!? きもひい、い、よおおおおおっ♡」

「お、おねえちゃ……あ———っ! や、おねえちゃんの、なか、なかがああ♡ ぼくもきもち、い、うああああ———っ!」

アンジェが叫びをあげるたび、フラッシュしたかのように胸の回路が瞬いて激しい反応を示している。

保護者としての自覚も姉としての誇りも消え去って、奉仕機械としての設定とセクサロイドの性欲に制御される壊れかけた機械人形と化して。アンジェリカは縮まりのない笑みを浮かべたまま、少年の上で上下動を開始する。

「ぴゅぎんっ♡ だめええ♡ あたま、おかひく、なるうう♡ かいろ、オーバーヒートしひょううう♡ ぴゅぎいっ♡ ああ、愛情度が更新されました、たた。かか、快樂中枢回路負荷が上昇しししエラー、ええ、えらー、えらーっ♡ あひいひいっ♡ ガブくん、どんどん、すきになるの、とまんないひいひい♡ せっくす、せっくす、しゅごいよおおお♡ だめになるうう♡ えっちでだめなせっくすするぼっとなるううう♡」

「お、おねえちゃん……ぼくも、ぼくも、アンジェおねえちゃん……すきい……」

ガブリエルの手が無意識に揺れる乳房に伸びて、下から包むように揉み上げる。

ぎゅ、と手のひらに力を込めれば人間のそれとは比べ物にならぬ滑らかさと内部機構の熱が伝わって。

「ぴゅいひいひい♡ かか、快樂信号おおおーばーふろーししししひぎいひいひいっ♡ だめ、だめ、お、おっばい、だめええ♡ が、ガブくん、も、だめ、お、おねえちゃん、おねえちゃ……あ———っ♡ かか快樂信号がおおおオーガズム閾値をををを絶頂し絶頂しま絶頂ししししみゃっぎいひい———っ!??」

アンジェが仰け反りノイズ混じりの悲鳴を上げれば胸の回路がばち、ばち、とショートを繰り返す、同時に動作音も高鳴っていく。その音に呼応するかのようにユニット内部が激しい締付けを開始し、吸い付くようにガブリエル自身にまとわり付いていたヒダが振動を開始する。

人間の精を絞り尽くすためだけに設計された機構に未経験の少年が抗えるはずもなく。

「うああああああっ!? お、おねえちゃ……!? な、なんかでる……でちゃうううううっ! だ、だめ……あああああっ!」

漏らしてしまうような感覚に、そんな事をすれば愛しい姉を内部機器を壊してしまうのではという恐れに駆られて必死でせき止めようと力を込めるガブリエル。だが。

「い、いいのおおっ♡ だして、だして、ガブくんのが、ほしいよおおおー————っ！ びゅ、ぎ、がび————♡」

アンジェの叫びに忍耐はあっさりと決壊し。

びゅる、びゅる、と白濁液が人造子宮に溢れていく。数瞬後、少年の初めての射精を受け止めた喜びがセンサーから伝達されれば。

「びゅ、ぎ。がび。……あぎ、あああああ————♡♡♡ きき、きもひよすぎぎぎかか快楽信号処理にしっばいししし快楽中枢回路に致命的なそんしょうがががびゅぎががが、ここ、こわれる、こわれる、こわれるうううっ♡ きもひよすぎて、おねえひゃん、こわれひゃううう————♡

ガブ、くううんんっ！ だい、すき、だよおおおお————♡ がび————！！！！」

愛しい少年への愛を叫びながら、アンジェの意識は途切れ。機能停止した、仮初めの命も失った身体から力が抜けて。

ゆらり、と傾くとそのまま少年を押しつぶすように倒れ込み。その体を受け止めようとした少年も気を失った。

数時間後。

作業を中断したビアンカとクレアに二人は発見された。

呆れとやっかみ、そして嫉妬の入り混じった二人にアンジェは問い詰められることになるが。

それはまた別の物語となる。